

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県病虫害防除所長

平成22年度病虫害発生予報第4号(7月)について

このことについて、病虫害発生予報第4号を発表したので送付します。

ブドウべと病とナシ黒星病の防除を徹底しましょう!

ブドウべと病とナシ黒星病の発生が増加しています。

ブドウべと病については、今年は早い時期から発生が認められるとともに、6月後半より連続降雨が続いていますので、多発園では防除の徹底を指導願います。

ナシ黒星病は展葉直後とともに、果実の肥大後期にも発生が増加します。果実及び花芽鱗片への感染防止のため、防除を徹底して被害防止に努めましょう



ブドウべと病(葉)



ナシ黒星病(果実)

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は、以下のとおりです。

天気は平年と同様に、曇りや雨の日が多いでしょう。

気温は平年より高いでしょう。降水量及び日照時間は、平年並でしょう。

週別の気温は、1週目、2週目、3～4週目を通して平年より高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	10	40	50
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区气象台 平成22年6月25日発表抜粋)

予報第4号

向こう1か月間における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病(葉いもち)	並	並	並
	ヒメトビウンカ	並	並	並
	縞葉枯病	並	やや多	並
	セジロウンカ	やや多	やや多	やや多
	トビイロウンカ	やや多	やや多	やや多
	コブノメイガ	並	並	並
かんきつ	黒点病	並	並	並
	ミカンハダニ	並	並	並
なし	黒星病	やや多	やや多	やや多
	ナシヒメシンクイ	並	並	並
ぶどう	べと病	多	多	多
かき	炭疽病	並	並	並
	フジコナカイガラムシ	やや少	並	並
いちじく	アザミウマ類	やや少	やや少	やや少
果樹共通	カメムシ類	やや多	-	やや多
茶	炭そ病	多	やや多	やや多
	輪斑病	並	並	多
	カンザワハダニ	少	並	並
	チャノコカクモンハマキ	並	やや多	並
	チャノホソガ	少	並	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	多	やや多	並
	チャノキイロアザミウマ	少	やや少	並
イチゴ	うどんこ病	並	並	やや多
	炭疽病	並	並	並

注：果樹共通 カメムシ類の発生量（現況）は前年比

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生
の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【普通作物 - 水稲】

普通期水稲

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

（2）予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（ ± ）。

発病株率0%（平年0.2%、前年0%）

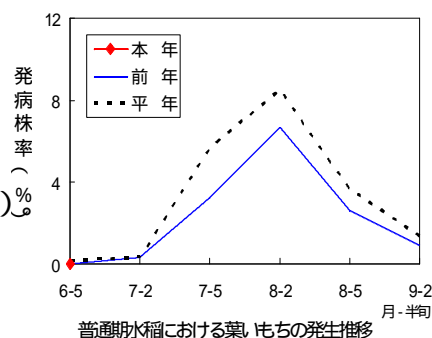
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、

降水量は平年並とされている（ ± ）。

（3）防除上の注意

ア 補植用の置き苗は本病の発生源となるので、早めに処分する。

イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生を認めたら薬剤散布を実施する。



普通期水稲における葉いもちの発生推移

2 ヒメトビウンカと縞葉枯病

（1）予報の内容（発生量）

ヒメトビウンカ：平年・前年並

縞葉枯病：平年よりやや多、前年並

（2）予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（ ± ）。

ヒメトビウンカ：10株当たり成幼虫数 1.97頭

（平年 1.6頭、前年 4.1頭）

縞葉枯病：発病株率 0.4%（平年 0%、前年 0%）

イ ヒメトビウンカ越冬世代のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、9.8%と平年より高かった（ + ）。

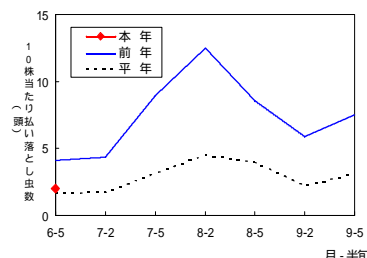
（平成15年から7年間の平均 6.1%、前年 8.4%）

（3）防除上の注意

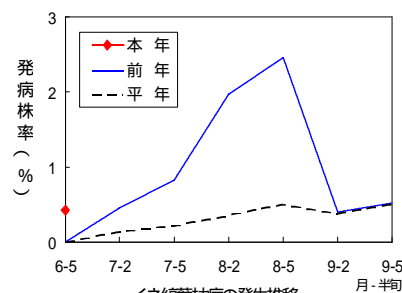
ア 移植期が早い（5月上旬～6月上旬植）ほ場では、発生状況に注意する。

イ ヒメトビウンカ越冬世代のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率が高いため、本種の発生が多い場合は、効果の高い薬剤で防除を実施する。

ウ 発病株を認めたら直ちに除去する。



ヒメトビウンカの発生推移



イネ縞葉枯病の発生推移

3 セジロウンカ

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

（2）予報の根拠

ア 5月30日に筑紫野市のネットトラップで初飛来を確認し、6月5半旬にも飛来があった（ + ）。

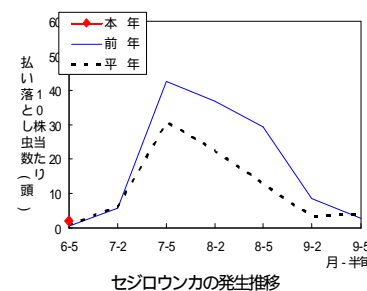
イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（ + ）。

10株当たり成幼虫数 1.9頭（平年 0.7頭、前年 0.6頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、曇りや雨の日が多い梅雨期間が続くとされていることから、今後も本種の飛来が予想される（ ± ）。

（3）防除上の注意

今後も飛来があると考えられるため、飛来状況に十分注意する。



セジロウンカの発生推移

4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月17日に筑後市予察灯で1頭捕獲された（本県での初飛来）。また、行橋市の予察灯に6月19日から24日にかけて毎日飛来があり、合計13頭捕獲された(+)。

イ 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

10株当たり成幼虫数 0.03頭（平年 0.001頭、前年 0頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、曇りや雨の日が多い梅雨期間が続くとされていることから、今後も本種の飛来が予想される(±)。

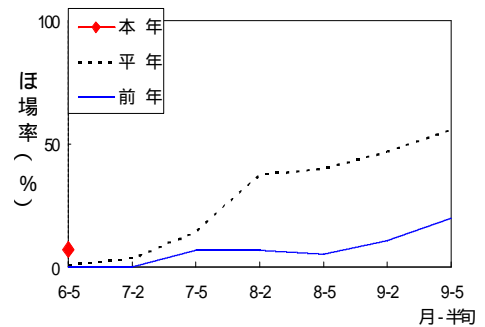
(3) 防除上の注意

ア 今後の飛来状況に十分注意する。

イ 箱施薬剤が施用されていないほ場では、発生状況に注意する。

また、移植期が早いほ場では、箱施薬剤の残効がなくなっている恐れがあるので注意する。

ウ ほ場内では集中分布をするので、ほ場全体の発生状況を把握する。



トビイロウンカ発生ほ場率の推移

5 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

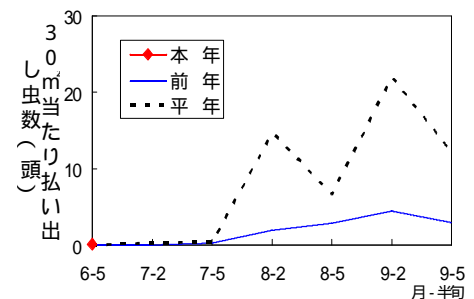
ア 6月5半旬調査の結果、早植水稻で飛来を認めている(±)。

30m²当たり払い出し成虫数 0.07頭（平年 0.03頭、前年 0頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、曇りや雨の日が多い梅雨期間が続くとされていることから、今後も本種の飛来が予想される(±)。

(3) 防除上の注意

コブノメイガに効果のある箱施薬剤（フィプロニルやスピノサド等を含む薬剤）が施用されていないほ場や、移植時期が早い（5月中旬～6月上旬植）ほ場では、飛来状況と発生状況に注意する。



コブノメイガの発生推移

【果樹】

1 かんきつ黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病果率 0%（平年 0.1%、前年 0.2%）

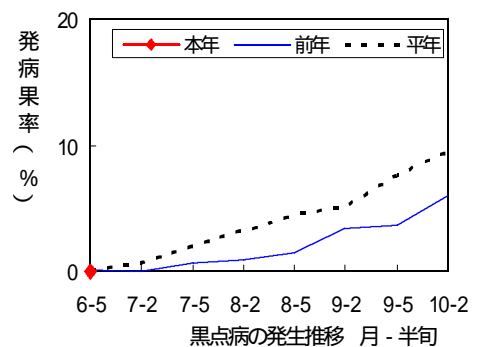
発生ほ場率 0%（平年 8.4%、前年 8.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出して処分する。

イ 前回の散布から1か月後、又は積算降水量250mmを目安に防除を実施する。



黒点病の発生推移 月-半旬

2 かんきつのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

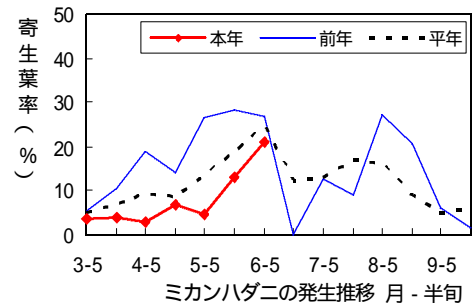
寄生葉率 21.0% (平年 24.7%、前年 26.9%)

発生ほ場率 54.5% (平年 68.4%、前年 66.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。



3 ナシ黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)

発病葉率 1.8% (平年 1.1%、前年 1.0%)

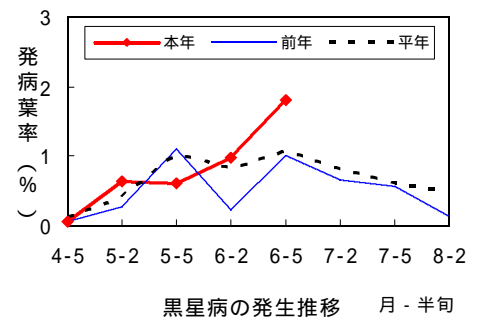
発生ほ場率 58.3% (平年 48.5%、前年 41.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉や罹病果実は伝染源となるので除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 なしのナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

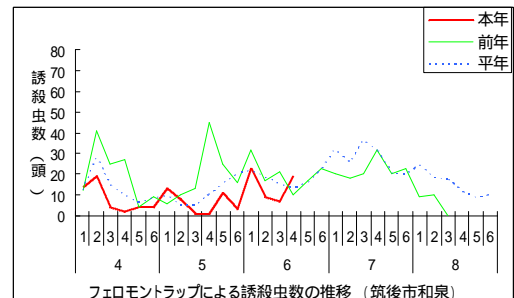
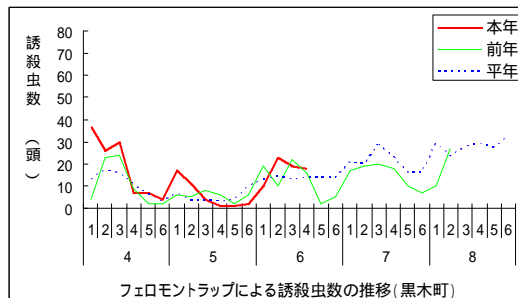
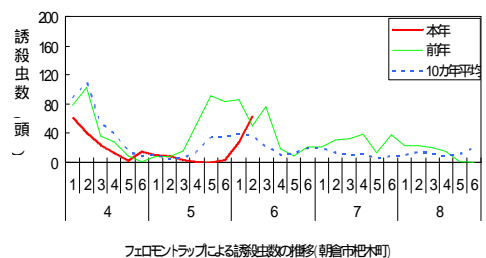
(2) 予報の根拠

ア 第1世代成虫発生時期(5月4半旬)から6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は平年並であった(±)。

< 県内3カ所の平均 >

107頭 (平年 141頭、前年 247頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。



(3) 防除上の注意

ア 発蛾最盛期直後を目安に防除を行う。

発蛾最盛期を過ぎても成虫が多く見られる場合は、7~10日後に追加防除を行う。

イ 幼虫は主に果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては果実に薬液が十分かかるように散布する。

ウ 被害果は埋没処分し、発生源を除去する。

5 ぶどうべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉率 4.7% (平年 0.7%、前年 1.9%)

発生ほ場率 54.5% (平年 25.0%、前年 33.3%)

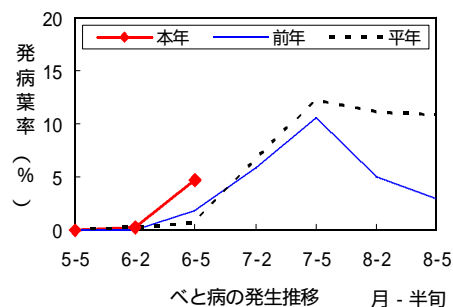
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 発病後の防除では効果が低いので、予防散布を徹底する。

イ 伝染源となる罹病葉は見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。

ウ ボルドー液は、散布直後に降雨があると薬害が発生するので注意する。



6 かき炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病枝率 0.2% (平年 0.6%、前年 0.1%)

発生ほ場率 7.1% (平年 23.8%、前年 7.1%)

発病果率 0% (平年 0.0%、前年 0%)

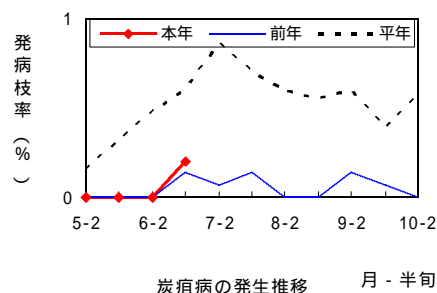
発生ほ場率 0% (平年 2.9%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果実は見つけ次第取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 前年発生が多かった園や本病に弱い早秋では、薬剤防除を徹底する。



7 かきのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

寄生果率 2.7% (平年 5.7%、前年 2.5%)

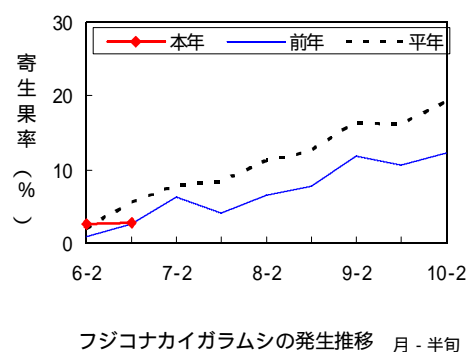
発生ほ場率 57.1% (平年 65.4%、前年 42.9%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 混み合った枝葉を整理し、散布ムラがないように丁寧に薬剤散布を行う。

イ 薬剤散布にあたっては、できるだけ天敵類に影響の少ない薬剤を選択する。



8 いちじくのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

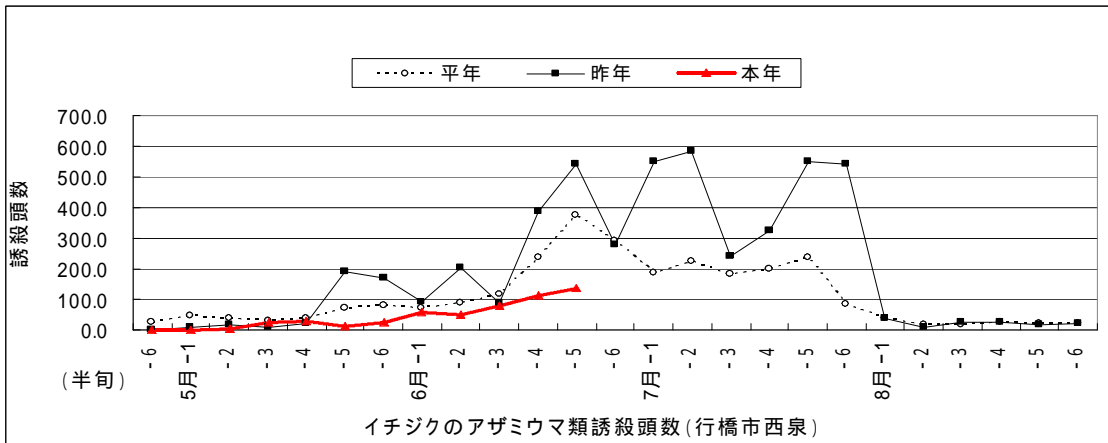
ア 6月1旬から5半旬までの誘引剤における誘殺虫数は、平年よりやや少なかった(-)。
<調査地点:行橋市西泉>

2,185頭 (平年 4,450頭、前年 6,555頭)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年とされている(±)。

(3) 防除上の注意

- ア 園地周辺の7～8月に開花する植物でも増殖するので、畦畔等の除草に努める。
- イ ほ場で発生が認められたら、定期的に薬剤防除を行う。



9 果樹共通のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：前々年、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬から6月5半旬までの予察灯のチャバネアオカメムシ誘殺虫数は、前年・前々年より多く、平成18年並であった。

また、ツヤアオカメムシ誘殺虫数は、前年・前々年並であった。

<調査地点：本所管内筑紫野市>(+)

チャバネアオカメムシ 1,122頭(前年 395頭、前々年 608頭、平成18年 1,074頭)

ツヤアオカメムシ 1,272頭(前年 1,332頭、前々年 1,654頭、平成18年 560頭)

<調査地点：筑後支所管内八女市黒木町>(+)

チャバネアオカメムシ 427頭(前年 246頭、前々年 151頭、平成18年 1,558頭)

ツヤアオカメムシ 293頭(前年 122頭、前々年 79頭、平成18年 95頭)

イ 4月1半旬から6月5半旬までのフェロモントラップの誘殺虫数は、前年・前々年より少なかった。

<調査地点：筑紫野市吉木>(-)

チャバネアオカメムシ 1,476頭(前年 5,316頭、前々年 2,006頭、平成18年 2,661頭)

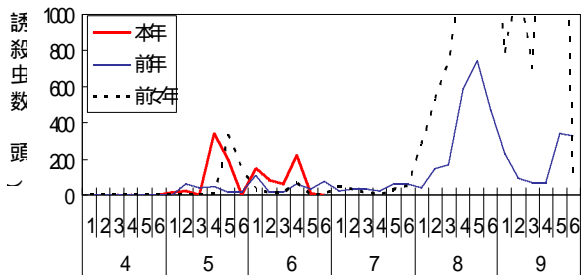
ツヤアオカメムシ 369頭(前年 1,082頭、前々年 971頭、平成18年 181頭)

ウ 6月5半旬調査では、ナシ果実の被害果は認められなかった(-)。

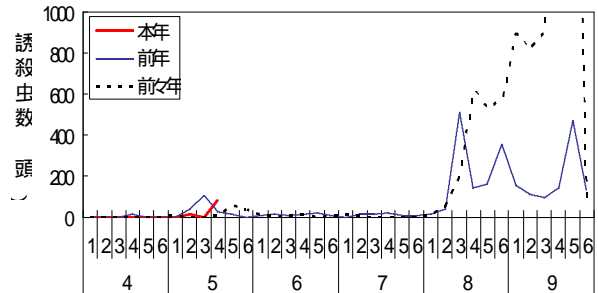
被害果率 0%(前年 0%、平成 0.3%)

エ 6月2半旬のヒノキ球果着生量調査の結果、着生量はやや少なかった(-)。

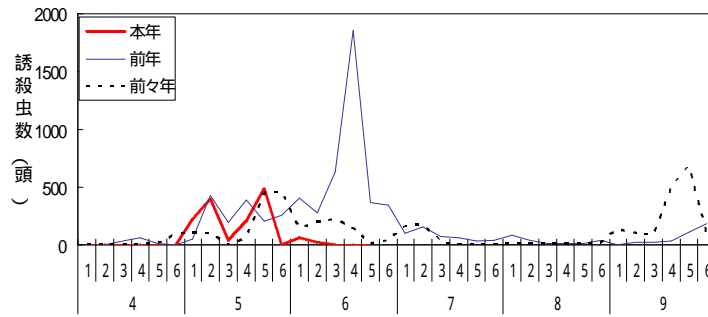
オ 向こう1か月の気象予報では、気温は平成より高く、降水量は平成並とされている(±)。



予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数の推移(筑紫野市) 月・半旬



予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数の推移(黒木町) 月・半旬



集合フェロモンにおけるチャバネアオカメムシの誘殺虫数の推移(筑紫野市) 月・半月

(3) 防除上の注意

- ア カメムシ類の発生量は前年並～やや多いと考えられるが、7月は果樹園への飛来は少ないと予想される。
- イ ヒノキの球果量はやや少ないので、常発地域やスギ・ヒノキ林に近接する園地では早い時期から飛来する恐れがある。
- ウ 園内における発生状況の把握に努め、飛来を認めたら防除を行う。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
	平年比	平年比	前年比
ナシ ハダニ類	少	少	少
カキ うどんこ病 ハマキムシ類	少 少	少 少	やや少 並

【茶】

1 炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半月調査の結果、発生量は平年より多かった(+)。

発病葉数 1.3葉(平年 0.2葉、前年 0葉)

発生ほ場率 20.0%(平年 6.9%、前年 0%)

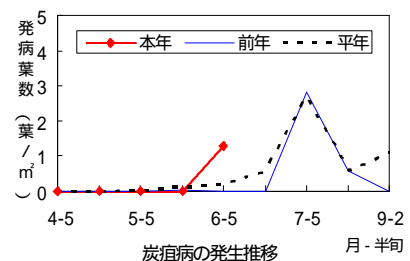
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 摘採・せん枝残葉での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により孢子が飛散伝搬するので、降雨前に防除を徹底する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉数 0葉(平年 0葉、前年 0葉)

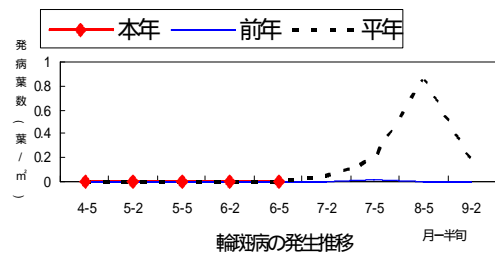
発生ほ場率 0%(平年 0.4%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上の注意

ア 葉や茎の傷口から病原菌が侵入感染するため、二・三番茶摘採又は刈落とし当日か翌日に防除を行う。

イ 輪斑病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 0%(平年 8.9%、前年 22.0%)

50葉当たり虫数 0頭(平年 28.1頭、前年 43.1頭)

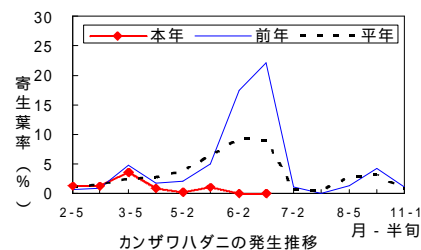
発生ほ場率 0%(平年 41.3%、前年 78.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

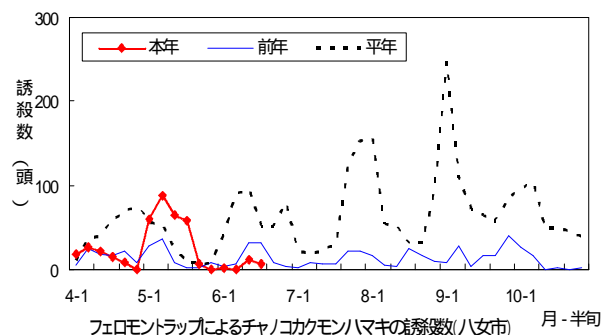
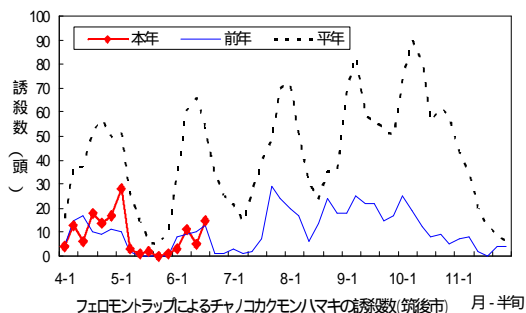
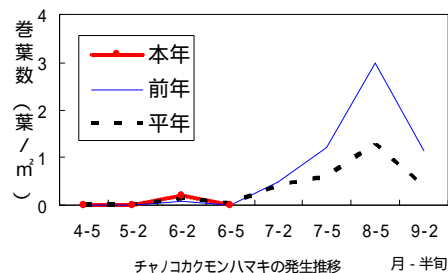
(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

被害葉数 0葉(平年 0.04葉、前年 0葉)

発生ほ場率 0%(平年 3.5%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月下旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

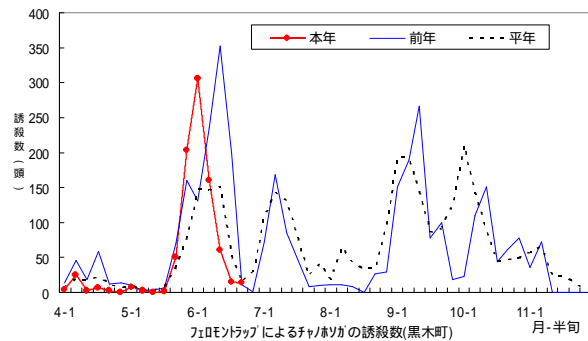
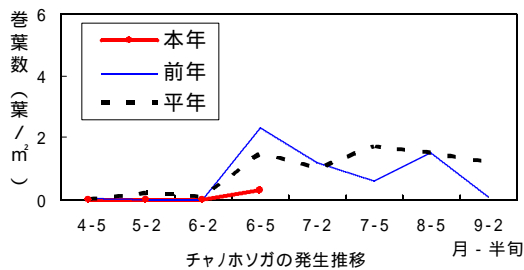
5 チャノホソガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。
被害葉数 0.3葉(平年 2.3葉、前年 1.5葉)
発生ほ場率 13.3%(平年 31.9%、前年 41.7%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は、7月中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。
- イ 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。

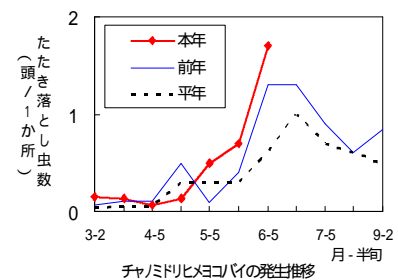
6 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった(+)
たたき落とし虫数 1.7頭(平年 0.6頭、前年 1.3頭)
発生ほ場率 73.3%(平年 43.6%、前年 58.3%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(-)



(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし(A4版白紙上)調査で、4頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
- ウ 効果が高い薬剤が少ないので、多発する前に防除する。

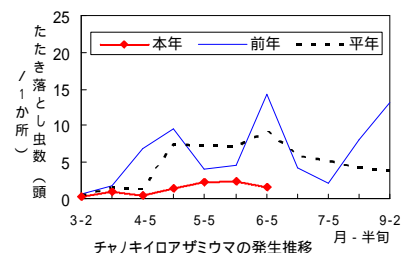
7 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)
たたき落とし虫数 1.7頭(平年 9.2頭、前年 14.3頭)
発生ほ場率 73.3%(平年 94.7%、前年 91.7%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)



(3) 防除上の注意

- ア たたき落とし(A4版白紙上)調査で10頭以上発生している場合は防除を行う。
- イ 新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。

【野菜】

1 イチゴ(育苗期)うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量: 平年(過去6か年平均)並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

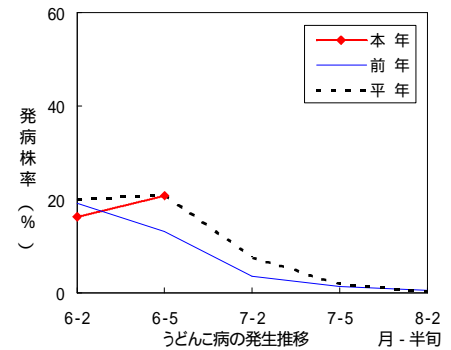
発病株率 20.7%(平年<過去6か年平均> 20.9%、前年13.2%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並とされている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 密植を避け通風を図る。

イ 伝染源である罹病葉は、摘葉するとともに、育苗期の薬剤防除を徹底する。



2 イチゴ(育苗期)炭疽病

(1) 予報の内容

発生量: 平年(過去6か年平均)並、前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発生は認めていない(-)。

発病株率 0%(平年<過去6か年平均> 0.2%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

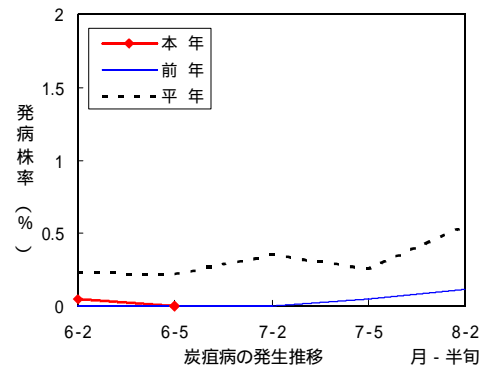
ア 高温期の降雨やかん水により急速に蔓延するので、ほ場内での発生状況に注意し、罹病苗は速やかに持ち出し処分する。

イ 雨よけ育苗等で風通しが悪いと発生しやすいた

め、通風を図るとともに、鉢の土壤水分を適切に保つようなかん水を行う。

ウ 窒素肥料を多用すると発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。

エ 発病後の薬剤散布は効果が低いので、葉かき作業直後や降雨前後を含めて定期的に、予防散布を徹底する。



【野菜・その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
イチゴ ハダニ類	並	並	やや多	<ul style="list-style-type: none"> 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。 ほ場内や周辺の除草を徹底する。
アスパラガス 斑点性病害	やや少	やや少	やや多	<ul style="list-style-type: none"> 過繁茂にならないように摘葉を行い、ほ場内の通風をよくする。 多発後は防除が困難となるので、発生状況に注意し、初期防除を徹底する。 黄色蛍光灯を設置しているほ場では、日没1時間前～日の出後1時間点灯する。
アザミウマ類	並	並	並	
チョウ目 (ハモトウ・材外カ)	並	並	並	

農薬の危害防止に努めましょう
～6月から8月は「農薬安全使用運動」期間です～

福岡県では農薬の使用機会が多い6月～8月を、「農薬安全使用運動」の実施期間として定め、農薬の安全・適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故を防止することを目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を、関係機関・団体が一体となって取り組みます。

散布者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

農薬安全使用運動重点啓発事項

- 散布前に必ず農薬ラベルを確認
(適用作物・使用量や濃度・使用時期・総使用回数)
- 散布時には近隣作物や住宅街への飛散防止を徹底
 - ・風、散布方向、散布時間、散布圧に留意
 - ・飛散しにくい農薬(剤型)や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用
 - ・散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意
- 水田除草剤や本田粒剤では、使用後7日間の止水を遵守
 - ・水田において農薬を使用するときは、散布後3～4日間たん水状態を保ち、散布後7日間は落水・かけ流しをしない
- 散布後は必ず散布器具(タンク、ホース等)を洗浄
- 防除履歴の正確な記帳
 - ・薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布年月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する

病害虫防除所では、病害虫の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。
 ホームページ <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4704204.html>
 電子メール kfok0301@sp.jpjn.ne.jp